

「表現」と「理解」との関連指導

—— 読みの力が書く力に転移する指導の実践から ——

川 津 啓 義

はじめに

作文を好きだとする生徒は、ごく希である。しかし、本当に嫌いなのかというところでもない。初発の感想を自的な形式で書かせればなかなかの意欲を示すし、要旨、主題をまとめる段階でも生き生きと鉛筆をはしらせるからである。結局、書かせる前の教師の手だてに問題があり、教師の事前指導のひと工夫にこそ作文力をつける秘訣がある。

新指導要領における国語科の指導内容は、言語能力に基づく「表現」と「理解」との相互関係として「表現」に重点がおかれている。従って理解力をつける目的も表現力に役立つための理解力をつけるという考えに立っている。

矢口龍彦氏（札幌市教育委員会指導主事）は、次のように述べている。「表現力と理解力」といった能力の転移にかかわる視点からの関連を考えることが、表現力に比重をおいた国語力の向上と内容精選をねらいとした今次改訂を生かすことである。この表現活動と理解活動を関連させた学習としては、理解のために表現する（読みとるために書く）ことが多く実践されていた。また、表現するために理解する（書くために読む）も比較的されてはいたが、作文教材の読解といった程度の範囲からはあまりでいていなかった。これらの関連学習に対し、「表現」と「理解」を対等に関連させる学習は、実践されていないのが実状である。この「表現と理解の関連」の三つの相に、これほどの差異が生じた主要因は、読むため、書くためという手段や方法のための「活動」を関連の内容とするものと、指導性という活動のレベルをこえた「言語能力」そのものを関連の内容としたものとの違いによると考える。そして、活動を通してどのような表現力や理解力が培われるのか、能力相互の相補性について、ほとんど吟味されていない。ここに表現力と理解力の関係、表現力に転移しうる理解力の構造を明らかにする必要がある。

（教育科学国語教育No.243）

矢口龍彦氏のいう「言語能力」そのものが活動を通してどのように表現力や理解力を培い表現力に転移しうるのか。そこで、「表現」と「理解」との関連指導、特に、「読解指導」と「作文指導」の関連が問題になる。書くことと読むことを別個に指導するのではなく、書き手の立場で文章を読み、読みの力が書きの力に転移する方法をここに試みる。

筆者想定立場から、筆者と対決し、製作過程に迫る読み、筆者の想に迫る読みを通して、書き手の主体的な読みを培い、書き手に内在する表現意識を目覚めさせ、意欲的に文章表現できることに主眼をおく。また、筆者のことば（語い、語句）や表現（文体の特徴など）の工夫、苦心にも着目し文章表現に生かせる関連指導をここに究明したい。

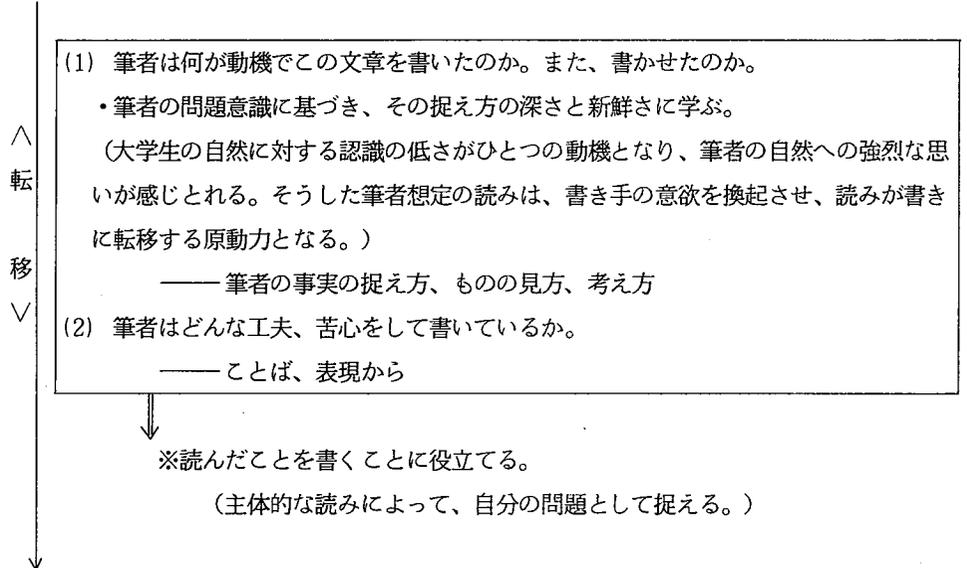
指導の実際

—— 教材「自然から学ぶ」（三省堂中2）斎藤喜博 ——

（「君の可能性」による。1971年筑摩書房刊の「第三部君ならどうするか」の「四、自然から学ぶ」から採録）

1. 指導の手順

読み………書く立場で読む〈主体的な読み〉



※読んだことを書くことに役立てる。

（主体的な読みによって、自分の問題として捉える。）

書き………“自然と自分の生活とのかかわりについて”というテーマで、「生活感想文」を書く。

「生活感想文」—— 斎藤喜博氏の自然の広くて深い捉え方に学び、ひとりよがり視野の狭い捉え方から脱皮させる。そして、身近な生活の中から問題を捉え、生活体験（事実）を通して考えを広め深める。生活感想文を意見文、論説文の発展として広義に捉えて、自由な発想で書けることを重視する。

- (1) 自分なりの問題意識をもつ。

 - ・読みの過程において、共感したこと、疑問に思うこと、反発などから。

（筆者の深い問題〈問題意識〉の捉え方を学ぶ。問題を問題として捉える、筆者とのかかわりあう問題状況があったはずである。筆者の自然に対する考え方に共感する方向で、自分なりの問題意識をもつ。）

(2) 自分の捉えた問題を事実と自分の考えに整理し、関連づけて構想を立てて書く。

 - ・事実と自分の考えを明確にする。

（事実があって、その事実をどう捉えるかというよりも、事実を事実として捉えた時筆者の心の中には、すでに問題意識があると考えた方がいい。それが、事実を主体的

に捉えたということである。

“意見を明確にする”といっても、表現法とかかわって、意見を露骨に述べるのがすべてではない。暗示的な表現こそ効果的である場合がある。）

- ・筆者の工夫、苦心を生かす。

2. 授業の実践

読み

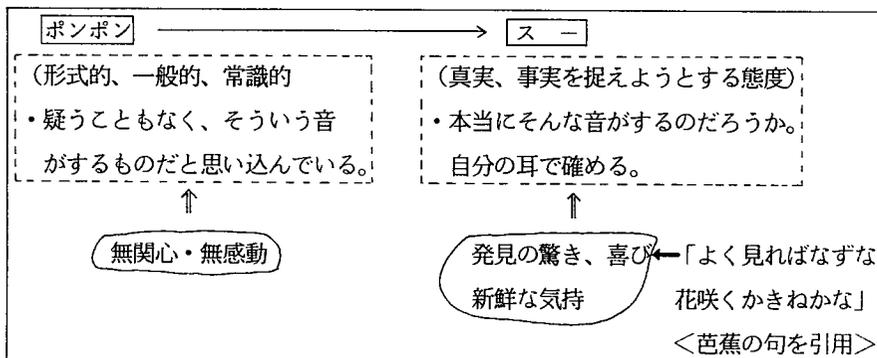
(1) 教材の要旨

- ・自然は人間に生なるものを与えてくれる。活力を与えてくれる。
- ・自然は人間の心を清らかにする。自分をとりもどし、生きる道しるべを示してくれる。

※この要旨から、願いともしえる筆者の想を窺うことができる。それを追求し、迫ることによって書き手の意欲を喚起させる。）

(2) 筆者の工夫、苦心 <生徒の発表、板書から>

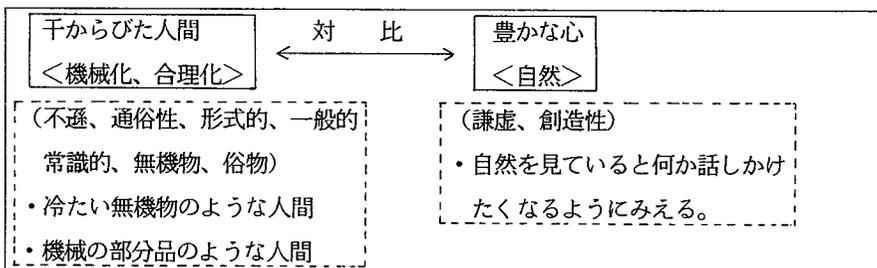
ア. 事実の捉え方 (月見草の例)



※・事実を事実として見る、確かなものの捉え方

- ・花ひとつにも、機械むしろ、それ以上にすぐれたものが持ち備えられている。

イ. ことば (語い、語句) の使い方



※・平易な文章の中に漢語が効果的に使われている。

- ・自然と人間のかかわりにおいて、ことばを選び対比させている。

(干からびた人間と豊かな人間)

- ・人間を機械の部分品と捉え、創造性のない、個性のない、人間らしさの失われたものとして批判している。

ウ. 表現 (文体の特徴など)

<ul style="list-style-type: none"> ・平易なことば ← 対 比 → 漢 語
<ul style="list-style-type: none"> ・含みのあることば <p>(何か大きな力が、何か静かに力を蓄えているように、機械か何かがあって、何か話しかけたくくなるような、何か起重機でも動かして、地下に何か機械でも入っている。 など、)</p> <p>(創造性、人間性、形式的、機械化、合理化など)</p> <p>・“自然”ということば3回、人間ということば3回登場している。</p>

以上、書く立場で教材 斎藤喜博氏の「自然から学ぶ」を読んできた。指導の手順に示すように、(1)筆者の問題意識に気づき、その捉え方の深さと新鮮さに学ぶ方向で、筆者をここまで情熱的にかりたてた所以を感得させることに重点をおいた。また、(2)の筆者の「ことば」「表現」あるいは「構成」にみられる工夫、苦心にも(1)とのかかわりにおいて授業を進めてきたが生徒にとっては(1)の段階に精力を使うことで手いっぱいであった。第二次作品において、(2)の点について多少の苦心の跡がみられるが、十分とはいえない。

(2)の点については、他の教材「友好使節」(三省堂中2)星新一、から、「和語と漢語」の小単元での実践例を示したい。

例文1. 「流れ星」 (2年Nさん)

夏休みの中旬頃に、たくさんの流星が100年に一度見えるというニュースがあり、早速見ることにした。最初に9時ぐらいに外に出てみたら、雲がかかっている空が見えなかったの、いっぺん家にはいり2時に起きることにした。

2時になったので、妹と父と外に出て目印の星を探したけれど、見つからなかった。少ししか見えなかったけど、流星をはっきりと見たのは初めてだったので印象に残った。けれど父は、そうでもないらしくじっと空を見たまゝだった。妹が一番はしゃいでいた。私は他にもペガサスを見つけることができた。これも初めて見たのでとてもうれしかった。星を見つけることが、だんだんおもしろくなり、一人興奮しながら流星が見えるまで探した。

4時にもう一度出てみたが位置はあまり変わりがなかった。理科の教科書を持ち出して、これはあの星ではないかとか、妹を相手に話していた。

次の日に、母が流星のことを聞いたので妹と二人で説明したら母は、「そんなことをして、カゼでもひいたらどうするの。」と、そのひと言しかいわなかった。

私はカゼのことより、流星について言ってもらいたかったので残念だった。それから、私はなぜ母は流星を見なかったのかと思った。あんなにきれいでなんとなく表現がオーバーだけど、神秘的で見ていてワクワクしたのにも思う。そのくせやたら休日となると、どこかへ行こうとうるさくなる。山へ行こうとか。私としては、もう少し山に行くにしても何をしに行くかもわからないようなことを言うよりも、いっしょに自然からつくられたものを見たりして、本当に少しでもいいから、自然に目を向けてほしいと思う。

※身近な生活の中から問題を捉え、斎藤氏の自然に対する考え方に素直に共感し、母親の自然に対する認識の低さを指摘して、自然に対するものの見方、考え方のパターン化をある意味では鋭く突いている。また、露骨に意見を述べず、暗示的な表現は、かえって読み手を引きつける魅力を持っている。

例文2 「自然と人間との協調性」 (2年 Eさん)

「自然と人間との協調性」、私にはそれが大事なように思われる。今は人間がこの地球を治めている。けれども人間だって自然界に生きる生物の一部分にしかすぎない。だから台風がきても大洪水が起っても大地震がきても今の科学で防ぐことができない。人間は自然と協調し合っ

て生きていけないといけないのである。
ところが、今は「こわされる自然」「自然をこわす人間」である。海の汚染、埋め立て、大気汚染などのことで、自然は破壊され人間はおごってくる。特に先進的な日本はその傾向が強

いと思う。大阪湾や東京湾などは埋め立てで、自然の形を留めている浜はほとんどない。科学が発達するにつれて、日本にとってこのせまい国土は頭の痛くなる問題なのである。
最近、日本の核廃棄物の南洋投棄が問題になっている。南島の住民達は言っている。「日本は世界でただ一つの被爆国なのに。そして、核廃止を叫んでいるはずなのに、このきれいな海に核廃棄物を捨てるのか」と、日本は安全だと言っている。けれどもなんの保障もない。何十年もずっと大丈夫だという例がないだけに漁業に頼っている住民達にとって不安は大きいと思う。テレビに出ていた日本が恐い。“ゴミ捨て場”にしようとしていた海は美しかった。水は透き通り、さんご礁のみえるエメラルドの海、そんなところに日本は恐い“ゴミ”を捨てるつもりなのだ。もちろん日本国民はそうでないと思っている。でも日本政府は、これからも説得を読けると言っている。そんなに絶対に安全だという保障があるなら日本近海に捨てればいい。わざわざ美しいなんの汚れもない海に捨てなくても工場廃水にまみれた日本の海に捨てればいいのだ。いくら日本の国土が狭いといってもそれ位の海はあるはずだから。

今、日本は「エコノミックアニマル」といわれている。産業を促進させていくために人間的な心を忘れ非人間的であるという例えである。日本だけでなく地球人がそうなったらどうなるだろうか。自然は私達が生きていく上でたいへん大切なものであると同時に心を育てていく上でたいへん重要だと思う。これからは人間の発展よりも自然との協調性を大切にしなければならぬ時代だろう。自然は私達の生きる心の支えになってくれる。

※“核廃棄物”の事例を新聞・テレビから取材し、自分の考えとを結びつけている。斎藤氏の論説文調の文体や構成の立て方に目を向け工夫して書いている。また、字数制限の中で、筋の通った文章に仕上げている。

以上2つの例文をあげたが、生徒作品には様々な傾向のものがみられる。指導の手順(1)に関していえば、斎藤氏の文章から受けた強烈な感動を自分の身近な経験の中で自分なりに受けとめ、こなそうとする努力が窺える。その点に於て、主体的な読みが書き手の意欲を喚起し、生き生きした文章を書かせる原動力になっていることは十分言えるのである。また、表現法やことば使い、あるいは、構想などについても部分的ではあるが、自分の文章に取り入れ生かそうとしている姿勢がみえる。

次に、指導の手順(2)〈ことば、表現など〉について、第1次作品と第2次作品とを比較しながら考えてみたい。

① 第一次生徒作品

「大きく美しいもの」 (2年 Mさん)

国語の教科書の中に「自然から学ぶ」というのがある。斎藤喜博さんが書かれたものであるが、その中で斎藤さんは、がまと月見草という二つの植物を見て驚き、「美しいなあと思い、大きいなあと思い……。」と書いておられる。そのうえ、「人間の力などでは、作りだすことができない。」とも書いてある。

私はこれを読み、最初はピンとこなかった。(何が大きいんだろう、何が美しいんだろう。)と思った。私が思う美しいとか大きいとかは、色や形(姿)、面積や体積だと思っていたから本当にその部分だけが頭にひっかかっていた。

それから数日後のことである。ちょっと変な話のだが、我家には割りとハエが多い。だれでもハエはイヤだろう。かく言う私も不潔なハエは大きらいである。そこで、殺虫剤をふりまくことになる。その日も一匹のハエがしつこく部屋を飛びまわっていた。私は何のためらいもなくいつものように殺虫剤をまいた。しばらくするとハエはポトリと床に落ちグルグルまわり始めた。よく見るとおしりの方から何やら出している。色は黄色で少し動いている。四ミリぐらいのものを、四、五本出した。まさしくうじ虫である。生み終えたハエはもう動かず死んでいた。

ハッとした。これだと思った。死ぬ寸前に後の世に子孫を残そうとしたハエ。苦しみに耐えながら立派に子供を残した。そんなハエに大きな強さを感じた。小さな体に大きな命を見たような気がした。虫でも人でも親が子供を思う心は美しいと思った。ここでやっと筆者に強い共感を覚えた。……(後略)

② 第二次生徒作品

「ある日の事件」 (2年 Mさん)

夏になると、うるさくなるもの。となりの家の風鈴。エアコン、殺虫剤の商業。そ

れにハエ。あの見るからに汚たならしい姿。見るのもいや……というのには昨年まで。ある日の事件がハエに対する考えを変えてしまった。……。

その日は、冷夏の今年にはめずらしくむし暑い日だった。少しだらけた気分で勉強机についた私は激しく頭の上をとび回る一匹の侵入者に気が付いた。しだいにイライラが高まった。

(うるさい!!) たまりかねた私は何のためらいもなく殺虫剤をふりかけた。

やがてハエは私の机の上で苦しみだした。クルクルと机の上をのたうち回った。そのユーモラスともいえる動きは、何げなく見ていた私の前でハエは、おしりの先から黄色っぽいものを出した。(何?) よく見ると動いている。三ミリにも満たないうじである。その時の私のおどろきと罪悪感分かってもらえるだろうか。あの小さな体で自分が死ぬ寸前に後の世に子供を残したハエ。感情を持っていない生物と思えなかった。そこには母親の偉大ささえ感じられた。(悪いことをした。) そう思った。たぶんハエは本能的にうじを生んだのであろう。そこに私は自然の大きさを見たような気がした。人間のものさしでは計れないものがそこにはあった。

…… (後略)

※自評で次のようにMさんは書いている。

自然なんて日ごろは考えていなかったんですけど、教科書の「自然から学ぶ」を読んで少しひっかかる場所がありました。それが文中の「美しいなあと思ひ、大きいなあと思ひ……。」「人間の力では作りだすことのできない。」という二か所です。なぜなら、何が大きいのか。何が美しいのか。形なのか色なのか。面積なのか体積なのか。私がある時頭に浮んできたのはそんなことでした。

あのハエの事件を見たのも偶然といえば偶然です。何げなかったのです。でも、「自然から……」を読んでいなかったら、(めずらしいものを見たな。) ぐらいで終わっていたでしょう。読んでいたからこそ、(わっ大きい!!) と素直に思いました。そして、これが自然の生の姿なんだとハッキリと知ることができたのです。

事実を事実として自分の目ではっきりと捉えたMさんの喜びを読みとることができる。それは、平素気にもとめなかったことに新鮮な驚きを持つことであり、価値を見出すことである。“よく見ればなすな花咲くかきねかな” 芭蕉の句の本当の意味を知った発見の喜びだったのである。自分が今まで気づかなかったことに気づき、新たな考えを持ち得たことは認識の高まりを意味し、事実を事実としてはっきりと自分の目に見えてくることである。その時点で、その認識は事実と意見を明確にし、自分の意見を持つことの価値ある意味をはっきりと認識できたことになる。

第二次作品になると、題「ある日の事件」からも窺えるように、事実(ハエのできごと。)をもとに冷静な態度でことばを選び、感動をもろにぶっつけないで少し隔りをもって書いている。その点、文章の勢いや新鮮な感動が直接読み手に伝わってこない。文脈の中でことばを生かすことの難しさを痛感する。

終わりに、前述した指導の手順(2)を補う意味で試みた教材「友好使節」(三省堂2年、星新

一) での実践例を述べる。

1. 小单元 “和語と漢語”

2. 目 標 ・日本語を形づくっている和語と漢語について、その違いや役割を理解させ、正しく豊かな言葉の使用ができるようにする。
 ・語いを豊かにし、語句を選択して使用する能力と言葉に対する感覚を養い、効果的な表現と的確な理解の力をつける。

3. 学習展開 <教材 “友好使節” 星 新一>

◎ 星 新一らしさ、特徴

- 現代風刺・皮肉 ◦SF小説、現実的ではないが理屈がとおりうなづける。
- 人間をよく観察している。 ◦いろいろな視点から人間を見ている。 ◦簡潔な文章（結末のおち、冒頭文、書き出し、会話の使い方、N氏、M氏、一文の字数が少ない。句点の数が多、改行が多い、漢字が少ない。） ◦漢語的表現が使われている。

① 正体不明の物体が、地球にむかって接近しつつあるようです。（冒頭文）—— 漢語的表現

② わけのわからないものが、地球にむかって近づきつつあるようです。—— 和語的表現

◎ 設問

- ① ①と②の感じ方の違いについて書きなさい。
 ② 具体的にどんな場合につかうか、①、②それぞれについて書きなさい。
 ③ 「正体不明・わけのわからない」、「接近・近づく」などを使って短文を作りなさい。

<生徒の答え>

◦設問①

①漢語的表現 「正体不明」「物体」「接近」	きびきびした感じ、身近でなく距離を感じる、SF的、緊張感、恐怖感、かっこよさ、UFO、わけのわからないもの、時間とともに確実にやってくる
②和語的表現 「わけのわからない」「物」「近づく」	やさしさ、広い意味、犬が近づいてくる、夏が近づいてくる、A君の考え方に近づいてくる、相手が弱い、かわいい、気軽に使える

◦設問②

①漢語的表現	◦推理小説、SFなど視野の広い作品に使い複雑さを出している。 ◦ものすごく影響を与えるような重大なとき ◦場面が全体的に緊張し、近代的な話題をもとに描くとき ◦SF的文章、報告文、ニュースでの報道（固い感じの文）
②和語的表現	◦小説などでも素直な表現のとき、あまり深刻な感じを与えない作品に使うとき。 ◦子供向きの物語で夢を広げる時（童話物語） ◦日常的な会話、体験談

◦設問③

- ① 銀行に強盗が入り、銀行員を人質にしてたてこもっています。銀行のまわりには、厳重な警戒がしかれていますが、犯人からの反応はなく、今もなお銀行付近は静まりかえっています。
- ② 銀行に強盗が入り、銀行員を人質にしてたてこもっています。銀行のまわりには、警官がいて厳しく取り締まっていますが、犯人の反応はなく、今もなお銀行のまわりは、静まりかえっています。